哲學研究　第二百十二號

新刊紹介

Dr. Robert Schinzinger; Sinn und Sein: Studie zum Problem der Ontologie

（1）

こゝに公にされた勞作は著者が既に永らく大阪高等學校に教鞭をとられる傍ら續けられた倦まざる努力の結晶であつて、一昨年秋より冬にかけて、東北帝國大學に於て同じ題目の下に、「カント及びライプニッツの哲學を特に顧慮して」講ぜられたものである。存在の種々なる樣相を、意味の分析を通じて明確に規定する事が此書の課題である。存在を意味の法則性乃至超越性に歸し去らうとする先驗觀念論と、存在の根源性を承認してそこから意味・認識の問題を解かうとする存在論とを統一して、意味が固有の客觀性を有しつゝしかもそれの充實者、實現の原理として必然に存在を要求すると考へる所に著者の據られる觀點がある。しかしてかゝる立場から存在を方法的に規定することが著者の主張せられる存在論の內容をなすのである。かゝる企圖が如何に遂行せられてゐるかを重要な諸點に於て顧みよう。

まづ存在論の、學問的認識としての一般的構造を示すことが必要である。存在論は、特殊存在者の存在の原理的規定を既に前提せる個別科學とは異り、全體としての存在の本質を問ふ。從つて此問への答は全體存在を主語として之に述語を與へる判斷の形をとる。さて一つの判斷的言表が眞理であると言ひ得る爲には、述語の規定が主語の表はす存在それ自身に屬してゐなければならぬ。主語的存在が述語規定を自らの中に含み、判斷は分析的でなければならぬ。「存在と認識との一致」に存する存在論的眞理要求は分析判斷によつて充たされる。然るに認識は擴張的に新なる眞理を獲得して行くものである以上、カントの主張した樣に、判斷に於て主語の本質には含まれぬ規定が述語づけられねばならない。認識は原理的に綜合的である。併しそれでは綜合的認識は如何にして眞理であり得るか。それは根據づけられる事によつてである。ライプニッツは充足根據の原理によつて、人間にとつて直ちに分析的に洞察し得ぬ「事實眞理」も亦潛在的に分析的眞理性を有することを說明しようとした。ライプニッツに於て未だ沒批判的に同一視されてゐた判斷と存在とを分ち、先天綜合の可能根據を求めたカントも、正にこの問題をとり上げたのである、そして彼の認識論が、かの古來の眞理の定義を破つたのでなく、物自體への固執からも察せられる通り、却つてそれを維持したものなる事は注意すべきである。さてかゝる根據づけはイデーの全體性によつてかの眞理要求との合致の保證を得ることが出來る。前面には絕えず新たに湧き出づる經驗の泉を持ち、後方にはイデーの全體性によつて支へられた根據づけの連關を有する——存在全體についての學問たる

存在論はかゝる構造を有してゐるのである。

存在論の學問的構造についての上の様な研究は同時に判斷意味が常に存在への關係を含む事を教へてゐる、判斷には存在との合致の要求が本質的である。さて存在論は其形式からいへば判斷による存在規定であるが、そこに内容として論ぜられる存在及意味は判斷の意味、判斷の規定する存在に限られるのではない。却つてそれらは夫々意味及存在の特殊な様態なのである。それ故我々は、より包括的に意味及存在の特殊な様態並に聯關を探らねばならない。

まづ意味の一般的構造は何であるか。Sinnといふ獨逸語は、例へばSinn einer Rede といふ時の如く客觀的な意味をもつと同時に、Ich habe etwas im Sinn の如く主觀的意味にも用ゐられる。今この語の種々なる意味が生れ出た母胎ともいふべき現象を求めるとそれは最も廣い意味での im Sinne haben 思念する事である。どの様にかして告知される所の、客觀的に存在せる事態に對して、主觀が開かれてある事、卽ちデカルトの考へた如き廣き意味での cogitatio である。意味は常に「cogitatio の意味」である。然るに意味はまた客觀的に其自身の存在を有し同一性を具へてゐる。一つの意味が反對に轉ずるといふ辨證法も却つて之を前提してゐる。かくて意味は二重性を有するのである。所で我々が、その時々の反省によつて世界を「我々の世界」として意識する場面を視界（Perspektiv）と呼ぶならば意味は現實的には常に視界に於て我々に對するといひ得よう。

そこで今、存在への問がさしあたり理論的な問であるに鑑みて意味をも、常にことば（Rede）に於てあるところの、理論的對象的意味に限つて論ずるならば、そこに三つの契機が發見される。個人的又一般的視界の「志向的意味（Bedeutung）」、ことばに於て表現される對象的意味」、最後に、意味の同一性の要求として考へられねばならぬ所の、對象的意味の核としての「純粹對象的意味」の三つである。此最後のものは現實の視界に對して超越性をもち「事象そのもの」なのである。

さてかゝる「意味」に對して「存在」は如何に考へられるか。既に意味に於て「事象そのもの」を考へた後で尙之を存在に關係させ得るであらうか。我々は存在そのものに向はればならぬ。總ての意味への關係を脫せる存在に向はればならぬ。併しその時存在は現實的とも可能的とも或物とも規定する事ができない。それは無でないといふより外はない。では無とは何か。それは「此物で無い」といふ時の様に既に何等かの意味を帶びた無である事はできぬ。そこで存在と無とは意味の否定といふ共通の性格をもつことになる。併し存在は無でない、無でないことが存在があらはにする。かくて存在は、はじめ、意味の否定として考へられ、しかも單なる無に非ざる所から、再び意味に關係づけられる。併し意味と同一になるのではなく、存在は、意味の二重の否定を通じて意味を帶びたるもの（Sinnhaftes）として現はれるのである。存在の根本規定は Sinnhaftsein であるハイデッガーが不安に於ける無が存在そのものをあらはにするといつ

たのは正にこの事である。

此様な「意味に關係せる存在」としての存在は卽ち繫辭によつて示される Sosein であつて、存在を限定可能なるものとして示すに止まる故、パルメニデースやプラトーンが「眞の存在」として考へたものは直ちにかゝる存在ではない、それは「全體存在」「絕對存在」なのである。そこで存在の種々なる樣相は一般に單に「意味を帶びたるもの」としての存在と、「眞の存在」との間に位置づけて考へられるであらう。

存在が意味と分たれつゝ必然にそれに關係する如く、意味も亦、それが意味する存在を必然にさし示し、それによつて充實(erfüllen) される。そして「充實」とは空虛な形式が質料でみたされることを意味せず、erfülltes Versprechen といふ時の如き實現の意味に解せられねばならぬ。蓋し意味は現實の視界に於て可能的なことばの意味として常に「內容的」なのであつて決して單なる形式ではないからである。

於是「存在」といふ語の意味も亦存在へとさし向けられてゐる、そして存在は根源的に sinnvoll Seiendes である故、存在の意味の諸々の段階は卽ち存在そのものの規定であるであらう。

(II)

今や具體的に存在意味の諸相を展開すべきである、それは現存・本質・實在性・理念の段階を追ふ。

(1)現實の視界に於て直接無反省に見出されるは、「このもの」(Dieses) としての現存 Dasein である。之は旣に全體的な形態を具へて環境の中にある。之を混亂せる諸感覺要素の統一とか直接體驗の客觀化とか考へてはならぬ、さう云ふのは後から附け加へた解釋、作爲的な抽象であらう。さて現存は如何なるものにも――物的なると心的なるとを問はず――直接に見出される限りに於て、屬し得る。「考へられたもの」もその例外ではない。

(2)正にこの點に現存の自己止揚の機緣がある、考へられたもの、「思想に於ける現存」に對する反省に於て我々は現にあらざるものについても其「本質」Wesen を意識する。想起・再認の現象に於て、時間的に變ずる現存に卽して其同一なる無時間的本質が考へられねばならぬ。逆にまたかゝる本質が始めて現存の時間性をあらはにするのである。此樣に時間的な「このもの」から其本質を分化せしめ同時に「このもの」を本質として規定する志向的意味の最も單純な例は「名」である、命名は主觀的恣意によるとも考へられ(主觀的反省の媒介の必要を示す)、また、變化するものを眞にある所のものたらしめる魔術的操作とも考へられた(本質の發現 Aufleuchten を意味する)。さて本質は現存とは時間性に關して鋭く分たれながらやはり之と結び付いて「永遠の現在」と考へられる。ライプニッツの考へた、過去を負ひ未來を孕める現在とは、無時間的本質が現存に於て對象的に思念せられたものに外ならぬ。現存は本質をもつことによつていまや反省の客體、統一的な對象となる。

こゝから飜つて現存の眞相を、より明かに摑むことができる。個別的現存は、二つの方向に自己を超えて進むといへよう。一

方それは記憶再認を介して本質への傾向を内に含み、他方それは他の現存者との共在（Mitdasein）を通じて環境の全體に關係し、全體を表出する。現存は本質の Antizipation と全體の Repräsentation とを含むのである。之等は夫々時間性、空間性に相當するものである。しかして此事は、一般に意味そのものに連續性と分化性の屬する事を示してゐる。我々の研究が方法的であり得るのも意味の連續性と分化性とによるのである。

(2) 現存に於て本質が照し出される事によつて、現存は對象的存在として認識關係に入る事ができる。現存・本質の段階に於ける志向的關係は未だ知 Wissen であつて言表・判斷を含む認識 Erkennen ではない、對象をもつだけでなく、對象について語り、判斷するに至つて認識が成立つのである。さて言表は常に現存——いまや本質と現存とを含める存在を廣義の現存といつてよいであらう——についての言表であり、現存を主語としてもつ。しかして現存は述語とはならない。此事を否定するかに見える同一判斷も、述語として其同一なる現存そのものをもつのでなく、却つて同一なること Identisch-sein が述語なのである。さて現存が述語たり得ぬ事は明かに現存には rein な新しき意味段階の現はれたるを示す。言表の意味は固有の意味對象性を有するのである。かゝる判斷意味が卽ち範疇或は概念といはれるものに外ならぬ。此事と關聯して判斷は常に「自由」の契機を含み「思惟の冒險」であるとさへいひ得る、それは現存に非ざるものを定立するからである。更に認識の視界性も意識に對してあらはになる、認識が一定の認識目的によつて無限なる全體の中より對象を選擇し限定するのである事が對自的となる。

では判斷の限定する存在は何であるのか。いま量の範疇について考へると、前に述べた「現存の共在」が、量的判斷卽ち「數へる」ことの可能に關係するのを見るのであるが、併しそれが「現存」の共在なる限り、直ちに數へられる存在一般であるとはいはれない。現存は存在の一つの相に過ぎない。それでは存在とは思惟可能的なるものの全體といふべきであるか。否。認識の向ふ存在は其樣な空虛なアペイロンでなくペラスをもてるものとして、諸の視界の原理と共可能的 compossibile なるものでなければならぬ。數學に於ては公理と定義、先驗論理學にては「原則」が思惟可能を共可能にまで具體化するものである。上の、量の範疇の限定する存在はかゝる可能的なるものであつたのである。此樣な共可能性に於て現存が限定される時、それが卽ち現實性、實在性 Realität に外ならぬ。現存への關係は認識に於てはどこまでも斷ち得ぬものであつて、意味の連續性の原理が之を必然にしてゐる。自然科學に於ける實驗は其著しき例である。但しかゝる實驗と雖もやはり共可能性なる規定の外に出るのでない。それが「現存との共可能性」として經驗可能性、（先驗論理學に於ける共可能性）の中に含まれ得る事、カントの教へた如くである。

(4) 併しながら認識は本性上視界を限られて居り、從つて「眞實の存在」なる全體存在に完全に到達出來ない。存在論的眞理

要求の達成は根據づけの無限な過程に求められる外なく、そしてかゝる過程の無制約的全體を示すものがイデーに外ならぬ。それはカントのいふ如く統制的であつて構成的ではない。併し彼に於て充分認められなかつた、イデーの存在への關係がこゝでは強調せられればならぬ。それは現存に「眞實の存在」への方向を與へ、諸々の學的認識に對して、體系的に限られたる領域を規定し、それの概念構成の原理を與へ、其視界にとつて本質的なるものの選擇の原理として働く。そしてイデーによつて全體を立する事は、判斷の場合と同樣に、自由の人格的契機を含んでゐる。此事によつてイデーによる、「現存の新らしき方向づけ」Neuorientierung des Daseins が可能となる。例へばかの「歴史的發展」のイデーの如きは、歴史を新なる光の下に照し出したものとして、上の樣な「イデーの存在妥當」ontische Relevanz を明かに示してゐる。たゞそれはイデーそのものの現實的な所業 Leistung によつて始めてあらはになるのであつて、之を豫見することは出來ない。さてかくして存在はイデーにより存在自身と媒介され、「存在の自己反省」が達せられると同時に、意味は自らを實現して現實を豐沃ならしめる事が出來るのである。

さて存在論は上に展開された存在の諸の意味に對應して三つの部門をもつ事となる。第一、現存及本質の論としての現象學、第二、實在についての言表の論としての科學論、第三、イデーの論なる形而上學。

（III）

著者は存在論の原理論ともいふべき上の論議に基いて、次に「イデーとイデオロギー」なるテマを掲げ、主としてマンハイムの所說を批判しつゝ、知識の現實形態を明かにせられ、更に美的領域に於ても上の諸範疇の確證を試みられた。いまこれらの興味深き現代的なる主題に立入らずして、著者の根本的立場について敢て多少の私言をつけ加へようと思ふ。

著者は主としてカントの思想に立脚して、まづ彼に於て自然科學的に局限されてゐた現象概念を、ライプニッツの個別存在の導入によつて擴張し、次に後者と共に「共可能性の全體」を「眞の存在」と考へる事により、根據づけの、存在に對する充全性を保證してカントが殘した物自體の問題をも解かうとされたのであると思はれる。著者の主張される「思惟の存在妥當の原理」即ち「必然的にかく考へられ他樣に考へてならぬものはまたかくある」に於て、思惟とは「共可能性の思惟」とでもいふべきものであつて、之によつて、存在が自己を反省するのであり、意味は自らを充實實現するのである。さてこゝに存在と意味との關係は原理的には何等否定を含まぬと考へられてゐる事が注意さるべきである。存在を無と分つ事により、前者を根源的に意味充實者と規定する上述の論議は明かにそれを示してゐる。併しながら一方著者の高調される如く、認識は自由・冒險の契機を含み、虛僞の存在する根據もこゝにある（S. 52）のならば、其時存在が意味に對して必然的に示す所の否定性は原理的のも

のとなる、存在は意味の積極的否定、卽ち無の性格をもちきたる。逆に意味は存在との矛盾の可能をもつといふ事が出來る。之を認識の、イデーに達し得ざる程度上の不完全性と解釋し去る事は出來ない。然るに此樣に存在と意味とを矛盾的對立の可能に於てとらへる限り、存在論的眞理要求は、共可能性の思惟によつては達せられない。共可能性は單なる思惟可能性でなく現實の原理であるにしても、ライプニッツに於て明かな樣に、あくまで矛盾律の支配の下にあるのであつて、力學的現實限定の原理(S. 140)たり得ても矛盾的對立の可能そのものの原理とはならない。所で存在論的眞理要求は矛盾的なるものの結合を要求するのである故、之をみたす思惟は辨證法的思惟でなければならないであらう。辨證法は單に論理の內での運動(S. 137)でなく、單に意味の領域に成立つ(S. 108f.)のでなく、意味が存在に接する所にあるのである。意味が對象的に連續し分化するのならば、否定の自由、虛僞、惡しき意味でのイデオロギーといふ樣な事は本質的な問題とはなり得ぬ。更に「現存に新なる方向を與へる」といふ、イデーの歷史的なはたらきの可能も根源的に理解出來ないであらう。何故なら共可能性の全體それ自體に於ては豫定調和の體系が支配し、豫見し得ぬ新らしさは唯相對的に人間にとつてさうであるといふに止まるであらうから。

一方現存を存在の一樣相と考へながら、他方「意味と存在とに關するあらゆる問が現存から出で、其すべての答は現存に流れ入る」(S. 21)ともいはれる著者は、現存が實に範疇に對してのみならずイデーに對しても否定性を示す事が認めてゐられるのであらうか。若しさうならばイデーは無限な連續的進行の極限とのみでなく、自らに對する現存の矛盾反抗を媒介として全體性を實現すると考へらるべく、最早意味的存立として對象化されぬものとならねばならぬ。(そしてかゝる考へが、著者の否定された如き、意味と存在とを第三の基體に於て媒介せんとする獨斷的形而上學に非ざることは明かであらう。)

いふまでもなく、特殊科學に於ては無限な連續的發展を考へることが必要であり、自己矛盾的全體の現象といふ事は科學の內容としては空虛な幻想であらう。併しそれは既に存在論的基礎の上でいはれる事であつて、存在論そのものはかゝる終りなき過程そのものをも問はねばならないのである。初めに述べた存在論的認識の構造が、後に實在性の段階卽ち科學論で論ぜられた認識の構造と全く同一であることは、この存在論の最も問題的なる點を示してゐぬであらうか。存在論は、存在の自己媒介が同時に自己否定である事を充分に認める辨證法的存在論たるを要するのではないであらうか。

此樣な疑問——恐らくは理解の不充分によるであらう所の疑問——を禁じ得ぬにも拘らず、この書の示す嚴密な思索と包括的な歷史的洞察とはまことに尊敬すべく、敎へる所甚だ多きものといはねばならぬ。今や著者の母國に於ける政治的情勢がやもすれば學問の無視に向ふ傾向を示せる時に當つて、生誕の

地をこの國にもつかゝるすぐれた述作が出來るだけ多くの人に讀まれ理解されて深き反省の資とせられる事がこの上なく願はしい。それは我學界の責務であるとさへいひ得るであらう。高校時代親しく著者に教へを受け、其高潔なる人格に深き敬慕の念を抱ける筆者は、何よりもその事を願つて僭越の非禮を知りつゝ敢て此拙き紹介を試みたのである。

（紹介者　野田又夫　目黒文化協會發行、定價貳圓五拾錢）

彙報

倫理學研究會

九月二十九日（金）演習室に於て

ディルタイ學派に於ける道德社會學と社會學的道德論　田中潔君

美學讀書會

十月十日（火）美學研究室に於て

Ermatinger, Das dichterische Kunstwerk.　山田康一郎君

心理學讀書會

十月十二日（木）心理學教室に於て

歐米で見た心理學實驗所の二三　岩井勝二郎助教授

教育學讀書會

十月十二日（木）第十九教室に於て

Spranger, Gedanken über Lehrerbildung.　弘津徹也君

社會學讀書會

十月十三日（金）樂友會館に於て

社會形態と經濟形態　高田保馬教授